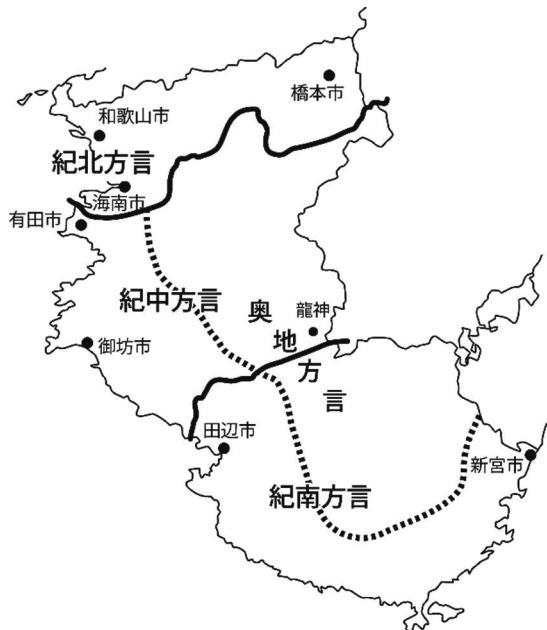


和歌山県田辺市龍神方言



和歌山県方言区画図

【和歌山県の方言区画】村内英一（1982）では、和歌山県の方言は、大きく紀北・紀中・紀南の方言、そして内陸部でも山深い地域の奥地方言に区画される。この区画は、高年層でより鮮明であるが、各地域の特徴的な方言形式は、若い世代ほど使用者が少なくなりつつある。紀北方言は少しずつ大阪方言的な特徴を帯びつつある。徳川宗賢・真田信治（1986）で報告があった、紀北地域での否定・否定過去のン／ナンダからヘン／ンカッタへの変化は、紀北だけでなく紀中、紀南地域にまで浸透しつつある。ただし、否定過去のナンダは中高年層に根強く残っている。

地域差がある（あった）現象としてアクセントを取り上げると、紀北方言は甲種アクセントで、紀中奥地の龍神、紀南の旧田辺市域と南下するほど、古い甲種系のアクセントが残り、さらに南東に位置する東牟婁郡の新宮市とその周辺では、アクセントの型が安定して実現しなかったり、クチナワ（●〇●〇）、ヤキメシ（●〇●〇）のように一つの語に下がり目が2つ見られたりすることもある。

アスペクトでは「飲む」の継続相の形式を例にとると、紀北で飲ンデルと飲ンジャールがそれぞれ優勢で、紀中ではジャールのr音が弱化した飲ンジャトも散見される。田辺市以南の紀南地域から紀東の三重県御浜町にかけては、飲ミヤルとなるヤル形が盛んに聞かれる。これらジャール、ジャウ、ヤル形式は、存在動詞のアルに由来するが、奥地方言ではオルに由来するアスペクト形式である飲ンドルなどのトル形が優勢である。また、否定形式は先述したン・ヘンの他に、b類動詞や「来る」「する」の否定形として見ヤン、食べヤン、しヤンなどのヤン形式が、紀北を中心に幅広く平地方言に見られる。このヤンは奥地方言ではあまり聞かれず、奥地方言域では、見ランなどの一段型活用が多段r語幹化した形が聞かれる。

【龍神方言について】かつての日高郡龍神村は、平成17年（2005年）に田辺市と合併して、現在は田辺市的一部分となっている。合併前の旧田辺市域は、紀南方言の中心的地域であったが、旧龍神村の田辺市龍神は、紀中奥地方言の特徴を持つ。この紀中奥地方言の大きな特徴は、本州ではこの地以外で極めて珍しい、二段活用の残存と考えられる活用形が断定非過去形と連体非過去形に存在することである。例えば「起きる」なら断定非過去と連体非過去形がオクルに、「開ける」ならアカルになる。これらの活用形の分布は、近年は高年層でも聞かれにくくなっている。紀中の平地方言でもわずかに見られるが、相対的に見れば、平地部よりも龍神をはじめとする奥地方言で盛んである。

【調査概要】本報告は、いくつかの調査をもとに行うが、主に、西尾と澤村とが2017年に田辺市龍神で実施した調査に拠る。この調査は、澤村が本記述用に立項された調査項目の共通語例文を作成し、主に西尾が話者に方言翻訳を求めるかたちで聞き取りを行った。対象となったのは、調査当時41歳（昭和50年生まれ）の男性と、64歳（昭和27年生まれ）、69歳（昭和23年生まれ）の男性の3名で、同時に聞き取りを行った。3名ともほぼ龍神生え抜きと言って

よい居住歴である。41歳の話者と60歳代の話者2名との間には、使用形式の新旧をめぐって、明確な回答の違いが随所に見てとれた。本報告の対象は、このうち、60歳代話者の活用体系である。

この調査を、以下では「2017年調査」と呼ぶことにする。また、41歳話者の回答を中年層の回答、60歳代話者の回答を高年層の回答と呼ぶことがあるが、これは実施した調査の中での相対的な世代差を表現した言い方である。それぞれの年層を代表するデータという意味ではない。

なお、2001年に真田信治、松丸真大、高木千恵、坂口直樹、西尾純二によって和歌山県日高郡龍神村（調査当時）で行われた動詞の活用調査の結果についても、本報告に一部反映させる。

調査で活用の記述対象となった動詞には、「起きる」「できる」「下りる」「食べる」「温める」「まくれる（転げる）」「甘える」「混ぜる」「寄せる」「見る」「蹴る」といった古典語の一段、二段動詞の他、「研ぐ」「出す」「死ぬ」「取る」「おる」といった五段動詞、そして「来る」「する」がある。他にも、複合動詞や受け身や使役、可能、尊敬といった接尾辞の活用が調査されている。

この調査で、調査対象となった話者は、大正7年、大正11年生まれの男性2名（当時83歳と78歳）、大正12年、15年生まれ女性2名（当時77歳と74歳）である。本報告中では、この調査を「2001年調査」と呼ぶことにする。男性2名は20代の頃2、3年間、徴兵されて龍神を離れているが、その他は外住歴がない。女性2名の話者は、生え抜きである。

最後に、『きのくに民話叢書5 紀州・龍神の民話』（和歌山県民話の会、1987年。以下『民話』）も記述のための資料として利用した。この民話集は、当地の話者から民話の聞き取り、書き起こしが行われたものである。明治生まれの話者が多いが、大正生まれや、少ないが昭和生まれの話者も含まれる。収録された民話の中には、当時・当地の方言と見られる言葉の使用が随所に見られる。この民話資料を『民話』と略称する。

以上、記録された話者の生年に時代的な幅がある3つの資料を、記述のために用いる。なかでも、2017年調査時の60歳代話者の活用体系を中心に記述し、その前後の時代の状況についても触れていく。

和歌山県田辺市龍神方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	二段型 起きる	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ミル オクル	オキル オクル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	オキタ	キタ	シタ
	命令	カキー カケ	ミー ミロ ミレ	オキー オキロ	キー コイ	セー
	禁止	カクナ	ミンナ	オキルナ オクンナ	クンナ	スンナ スナ
	意志	カコー	ミヨー ミロ (一)	オキヨー オ (ッ) キヨー	コー コヨー	ショ (一)
	推量	カクヤロー	ミルヤロー	オキルヤロー オクルヤロー	クルヤロー	スルヤロー
接続類	連体非過去	カク	ミル	オキル オクル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	オキタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	オキテ	キテ	シテ
	仮定	カイタラ カキヤー	ミタラ ミリヤー	オキタラ オキリヤー オクリヤー	キタラ クリヤー	シタラ スリヤー
派生類	否定	カカン カケヘン カキヤーセン	ミラン ミーへン ミヤセン	オキン オキヘン オキヤーセン	コン ケーへン キーへン キヤセン	セン シヤセン
	丁寧	カキマス	ミマス	オキマス	キマス	シマス
	使役	カカセル カカスル カカス	ミサセル ミサスル ミサス	オキサセル オキサスル オキサス	コサセル コサスル コサス	サセル サスル サス
	受身	カカレル カカルル	ミラレル ミラルル	オキラレル オキラルル	コラレル コラルル キヤレル	サレル サルル
	可能肯定	カケル	ミラレル ミラルル ミレル	オキラレル オキラルル オキレル	コラレル コラルル コレル キヤレル	《デキル》
	可能否定	カケン カカレン ヨー カカン	ミラレン ヨー ミラン	オキラレン ヨー オキン	コラレン キヤレン	《デキン》
	尊敬	カカレル	ミラレル	オキラレル	コラレル	サレル
	継続	カイテル カイトル カイタール カキヨル	ミテル ミトル ミタール ミヨル	オキテル オキトル オキタール オキヨール	キテル キトル キタール キヨル	シテル シトル シタール シヨル
	希望	カキタイ	ミタイ	オキタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクンヤ カクネン	ミルンヤ ミンネン	オキルンヤ オキンネン	クルンヤ クンネン	スルンヤ スンネン

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例 (過去形)	作り方
k	書く	kak・u	カイ-タ kをiにする。「イク(行く)」はkをQ(促音)にして「イッタ」。
g	嗅ぐ	kag・u	カイ-ダ gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す	das・u	ダシ-タ ダイ-タ 基幹イ段形を用いることが多い。語幹末のsをiにすることもある。
t/c	立つ	tac・u	タツ-タ t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ	sin・u	シン-ダ nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ	tob・u	トン-ダ bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む	nom・u	ノン-ダ mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る	kir・u	キッ-タ rをQ(促音)にする。
w/o	買う	ka(w)・u	wをQ(促音)にする。または、wをø(子音なし)にし、wの前の母音がaである場合はoに変える。基幹が1拍の場合は義務的に、2拍以上の場合は任意に長音化する。
	笑う	wara(w)・u	ワラッタ ワロ(一)タ

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカヤ シズカナ	ガクセーヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ シズカナカッタ	ガクセーヤッタ
	推量	アカイヤロー	シズカヤロー	ガクセーヤロー
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《ガクセーノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	ガクセーヤッタ
	中止	アコ(一)テ	シズカデ	ガクセーデ
	仮定	アカカッタラ	シズカヤッタラ シズカナカッタラ	ガクセーヤッタラ
派生類	否定	アコ(一)ナイ アカナイ	シズカチャウ シズカヤナイ	ガクセーチャウ ガクセーヤナイ
	なる	アコナル	シズカニナル	ガクセーニナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス	ガクセーデス
	のだ	アカイン(ヤ)	シズカナン(ヤ)	ガクセーナン(ヤ)

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

「調査概要」で述べたように、実施した臨地面接調査、文献調査では、明治から昭和生まれの話のことばが調査対象となっている。本報告での記述対象は、2017年調査時の60歳代話者たちの龍神方言であるが、時代的な幅が参照できる形で上表を作成したため、表には新旧多数の変異形が含まれる。その詳細については、「(2) 各活用形の特徴」でも触れるところがある。

多段型には、「書く」「おる」「死ぬ」など、そして「蹴る」といったa類の動詞が含まれ、一段型はb類の「見る」「出る」などがある。龍神を含む紀伊の中部（紀中・中部奥地）域は、本州では見られにくい二段型が見られる。二段型にはb類の「起きる」「開ける」「混ぜる」「寄せる」など、基幹が2拍以上の動詞が含まれる。不規則な活用をする動詞としては「来る」「する」がある。

多段型動詞の基幹にはア・イ・ウ・エ・オの五段の形と、基幹音便形とがある。「書く」を例にすると、カカン (kak・a-N)、カキマス (kak・i-masu)、カク (kak・u)、カケ (kak・e)、カコ一 (kak・o-R)、カイタ (kai-ta)となる。

音便形は、語幹末子音がk, sの場合、「書く」「出す」に過去のタを後接させる場合であれば、それぞれカイタ (kai-ta)、ダイタ (dai-ta)のように、基幹末がiとなる。ただし、ダイタのような語幹末子音sの動詞のi音便は衰退しつつあり、2017年調査の高年層には見られるが、中年層話者には見られなくなっている。また、語幹末子音がkのときは、「行く」だけはイッタ「iQ-ta」となる。語幹末子音がt, r, wの場合、「立つ」「切る」「買う」であれば、それぞれタッタ (taQ-ta)、キッタ (kiQ-ta)、カッタ (kaQ-ta)などQ音便化となる。語幹末子音がn, b, mの場合は、「死ぬ」「飛ぶ」「飲む」を例にすると、それぞれシンダ (siN-da)、トンダ (toN-da)、ノンダ (noN-da)と、N音便化が起こるほか、過去のtaがdaになる。

また、語幹の子音がwの場合は、「買った」がコータ (koR-ta)となることもあるが、衰退気味である。一段型には基幹末がイ段になるものとエ段になるものとがある。「見る」であれば、ミル (mi-ru)、ミタ (mi-ta)、ミテ (mi-te)、「出る」であればデル (de-ru)、

デタ (de-ta)、デテ (de-te)となる。「見る」の場合、否定がミラン (mir・a-N)、命令でミレ (mir・e)、意志で (mir・o)のように多段型のr語幹動詞に対応した形がある。2001年調査では、大正11年、12年、15年生まれの話者に「ミラン」が回答されている。しかし、このr語幹化した形は、「見る」以外の一段型動詞には見られなかった。一方、『民話』では「出らん」「出らなんだ」「寝らん」が、明治や大正生まれの語り手に見られる。

二段型の場合、基幹末がイ段とウ段になる動詞と、エ段とウ段になる動詞のいずれかである。「起きる」「開ける」を例にとると、「起きる」であれば、オキテ (ok・i-te)、オキタ (ok・i-ta)、オクル (ok・u-ru)。「開ける」であれば、アケテ (ak・e-te)、アケタ (ak・e-ta)、アクル (ak・u-ru)などと、それぞれイ・ウ段、エ・ウ段になる。

このような二段型の活用は、いくつかの接辞にも観察される。使役の(サ)セルであれば、(サ)スル (sas・u-ru/s・u-ru)、(サ)セテ (sas・e-te/s・e-te)、(サ)セタ (sas・e-ta/s・e-ta)、受身の(ラ)レルであれば、(ラ)ルル (rar・u-ru/r・u-ru)、(ラ)レテ (rar・e-te/r・e-te)、(ラ)レタ (rar・e-ta/r・e-ta)のようになる。このように二段活用する接尾辞は、2001年調査で高年層に安定して回答された。2017年調査でも、高年層では「使用する」という回答が得られるものの、一段型が優勢になりつつあったし、中年層話者では使用しないと回答される。

「来る」の基幹は、キタ (k・i-ta)、クル (k・u-ru)、コン (k・o-N)、コイ (k・o-i)のようにイ・ウ・オ段が基本だが、否定形としてケーヘン (k・e-RheN)というエ段の形も得ている。「する」については、シタ (s・i-ta)、シロ (s・i-ro)、スル (s・u-ru)、セン (s・e-N)など基幹が4段となる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

多段型はカクのように、ウ段形をとる。一段型はミルなど「基幹（語幹）+ル」、二段型はオクル、アクルなど「ウ段形+ル」、「来る」「する」も「ウ段形+ル」である。

・マイニチ アサ ロクジニ オクル。(毎日、朝、6時に起きる。)

- ・マド アクルド。(窓を開けるぞ。)

オクル、アクルは、2017年調査では、高年層話者で回答されたが、中年層話者では回答がなかった。なお、2001年調査は、大正生まれ話者4名が対象であったが、4名とも、調査対象となった全ての3拍以上のb類動詞で二段活用型の形をとっていた。

〈断定過去形〉

多段型動詞は基幹音便形（「多段型動詞の基幹音便形」の表を参照）になる。s語幹動詞が過去のタに接続する場合、基幹末シがイになるi音便形は、2017年調査では高年層に確認すると使用意識があり、中年層話者にはなかった。2001年調査や『民話』にはs語幹動詞のi音便形が多く見られる。

- ・テガミ カイタ。(手紙を書いた。)
- ・テガミ {ダシタ/ダイタ}。(手紙を出した。)
- ・スグニ タッタ。(すぐに立った。)
- ・モー シンダ。(もう死んだ。)
- ・アメ ヤンダ。(雨が止んだ。)
- ・モー カエッタ。(もう帰った。)
- ・オモワズ ワロ (一)タ。(思わず笑った。)

2001年調査では、ダイタを自発的に回答する話者もあり、その場合は、ダシタのほうが丁寧と内省された。データと言う人もいるというが、海南省あたりの言い方という認識も聞かれた。

『民話』でも「(問題、答え、熱を)ダイタ」という用例が得られる。

一段型動詞は基幹に「タ」を後接させる。二段型動詞では、オキタ、アケタなど動詞により基幹イ段またはエ段に「タ」を後接した形、「来る」「する」では、基幹イ段に「タ」を後接した形となる。

- ・テレビ ミタヨ。(テレビを見たよ。)
- ・キノー ココニ ハナコガ キタヨ。(昨日、ここに花子が来たよ。)
- ・モー シゴト シタヨ。(もう、仕事したよ。)

〈命令形〉

共通語と同形のカケ、ミロ、オキロ、コイがある。また、多段型・一段型・二段型動詞では、「書く」「見る」「起きる」「開ける」の場合、基幹を長音化して「カキー」「ミー」「オキー」「アケー」といった形に、「来る」はイ段基幹を長音化して「キー」になる。「する」はエ段基幹を長音化した命令形「セー」になる。長音を伴なわずにヨを後接して、ミヨ、オキ

ヨ、アケヨ、セヨとはならない。

- ・マイニチ シッカリ ニュース {ミロ/ミ
二}ヨ。(毎日しつかりニュースを見ろよ。)
- ・ハヨ シゴト セーヨ。(早く仕事しろよ)

他に命令では、「書く」「見る」などが「カキヨシ」「ミヨシ」になるヨシ形がある。これは女性が使用すると意識されたり、田辺市、和歌山市などの都市部のことばと意識されたりする。命令表現のヨシは京都市での使用がよく知られるが、和歌山市から紀南にかけて沿岸部でも、広く聞かれる表現である。

「見る」では、r語幹化した「ミレ」が見られたが、他の動詞では現れにくい。

〈禁止形〉

禁止形は、共通語と同様、断定非過去形に「ナ」を後接した形で表される。ただし、断定非過去形の語尾がルであるものは、ルがンに交替し、「ミンナ」「クンナ」「スンナ」という形式になる。「スンナ」の場合、ンが脱落して「スナ」となることもある。

- ・カッテニ テガミヲ カクナ。(勝手に手紙を書くな。)
- ・クダラン バングミヲ ミンナ。(くだらない番組を見るな。)
- ・グアイ ワリノニ ムリニ {オキルナ/オ
クンナ}。(具合が悪いのに無理に起きるな。)
- ・ココニワ クンナ。(ここには来るな。)
- ・アホナコト {スンナ/スナ}。(バカなことをするな。)

〈意志形〉

意志形は、多段型動詞では共通語と同じで、「書く」なら、基幹オ段の長音形カコーとなる。2017年調査では、「見る」の場合は、r語幹化が、否定のミランや命令のミレだけでなく、意志形でもみられ、ミロ(一)の形になる。いっぽう、二段型動詞の「起きる」「開ける」の場合は、オキロー、アケローのような形は確認されなかった。このようなr語幹化は使用意識が薄いが、「見る」の場合、カを後接させて、ミロカのようにすると使用意識が明確になる。

- ・ヒトリデ テガミオ カコー。(一人で手紙を書こう。)
- ・ヒトダンラク ツイタカラ イマカラ テレ
ビ {ミヨー/ミロカ}。(一段落着いたから、今からテレビを見ようか。)

- ・アンタワ ロクジニ オキヨー。(明日は 6 時に起きよう。)

2001 年調査でも、ミロカは確認される。しかし、やはり、どの動詞にもこのような r 語幹化が生じているわけではない。2001 年調査では、b 類（一・二段型）動詞としては、「見る」の他に、「起きる」「できる」「下りる」「食べる」「温める」「まくれる（転ぶ）」「甘える」「混ぜる」「寄せる」の活用が調査されたが、「見る」以外の動詞の全てで、オキロー、タベローなどの回答はなかった。また、2017 年調査と同様、ミロに力を付けてミロカにすると、ミロ形は許容度が上がるが、ミロ単独だと使用意識が弱くなる。

また、2001 年調査では、2017 年調査では見られなかつたオキヨー、オッキヨーの形が見られる。「来る」は、「コー」と、基幹に「ヨ（一）」が後接した「コヨー」が併存している。「する」は、基幹に「ヨ（一）」が後接して「シヨ（一）」となる。

- ・アスコソ ハヨ オキヨー。(明日こそ、早く起きよう。)
- ・マタ ココニ {コー/コヨー}。(また、ここに来よう。)

意志形にラを後接させて、「来る」ならコヨラ、コーラとする場合は、勧誘の意味となる。勧誘形であるがラをつけた r 語幹化形ミロラは、力を付けたミロカと同様に、ミロ単独よりも使用意識が強くなる。

- ・マタ {コーラ/コヨラ}。(また来ようね。)
- ・ツレモテ ミロラ。(一緒に見ようよ。)

〈推量形〉

推量形は、断定非過去にヤローを後接する形となる。二段型の場合、「起きる」では、2017 年調査でオクルヤローが見られるが、オキルヤローが優勢である。特に上の世代では、ヤローが後接する形のほか、ジャローが後接する。

- ・ハナコワ ロクジニワ {オキルヤロー/オクルヤロー}。(花子は 6 時には起きるだろう。)

2001 年調査では、古典語で二段型である動詞として、「起きる」「できる」「下りる」「食べる」「温める」「寄せる」「甘える」が調査項目であったが、それぞれオクル、デクル、オルル、タブル、ヌクムル、ヨスル、アバユルの使用意識が明確であった。

後接する推量形式は、ジャローとヤローが混在する。『民話』ではジャロー、共通語の確認要求表現である「あつただろう」にあたるものとして、アツクロの使用が明治生まれの語り手に見られる。

- ・ぶらぐり提灯ちゅのあつろ？(ぶらぐり提灯というものがあつただろう？) (『民話』 p.42)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、断定非過去形と同形である。

- ・フデデ テガミオ カク ヒトモ オルヨ。(筆で手紙を書く人もいるよ。)

〈連体過去形〉

連体過去形は、断定過去形と同形である。

- ・タローガ オッタ トキ オマエモ オッタカ。(太郎がいたとき、お前もいたか。)

〈中止形〉

中止形は、多段型動詞は断定過去形の基幹音便形にテを後接し、一段型・二段型動詞と、「来る」「する」は共通語と同様に、それぞれイ段（二段型動詞「開ける」などではエ段）にテを後接する。

- ・コノ エホンワ ハナコガ ブンオ カイテ タローガ エオ カイタ。(この絵本は、花子が文を書いて、太郎が絵を描いた。)
- ・チョット ミテ ミロカ。(ちょっと見てみようか。)
- ・ハヨ キテ ソンシタ。(早く来て、損をした。)

多段型 s 語幹動詞は、「傘をサイト（さして）」「ゴミをダイテ（出して）」のように i 音便形となるが、2017 年調査では高年層のみにその使用意識があり、中年層にはなかつた。『民話』でも「流いて」「隠いて」「殺いて」「思い出いて」などが見られる (『民話』 p.25、p.26、p.50、p.148)。

2001 年調査では、この i 音便形は、よく使う形式として安定的に回答される。2017 年、2001 年調査とともに、人によって「ダーテ」と言うとの報告もあつたが、過去形「ダータ」と同様に海南市あたりのものと認識される。

〈仮定形〉

仮定形は、タラを後接させるカイタラ、ミタラ、オキタラ、キタラ、シタラなどの形もあり、2017 年調査時点では、後接の接辞はタラが優勢である。2001 年調査では、「出したら」がダイタラなることが確認

されている。

2001 年調査で多く用いられていたのは、「書く」でカキヤー、「来る」でクリヤー、「する」でスリヤーなど、末尾を ja (R) にした形である。この形は、2017 年調査の話者には、かつて高齢者の使った言葉として認識されていた。二段型の動詞でも、オキリヤー、オクリヤーの形が、古い言い方として認識されている。

- ・テオ {ダシタラ／ダイタラ／ダシャー} オカシ アゲルデ。(手を出したら、お菓子あげるよ。)
- ・コノ バングミオ {ミタラ／ミレバ／ミリヤー} カンガエ カワルカモシレン。(この番組を見たら、考えが変わるかもしれない。)
- ・ロクジニ {オキタラ／オキリヤー／オクリヤー} マニアウ。(6 時に起きれば間に合う。)
- ・ココニ ハナコガ {キタラ／クリヤー}、ミンナ ヨロコブダロー。(ここに花子が来れば喜ぶだろう。)
- ・コノ シゴトオ {シタラ／スリヤー}、アシタワ ヤスマレゾ。(この仕事をしたら、明日は休めるぞ。)

〈否定形〉

否定にはヌ系の N 形と、ja(R)seN 形と heN 形といった「基幹+ワ+セヌ」系の形式が併存している。

安定して用いられるのは、カカン、オキンなどの N 形である。

「書く」のカキヤーセン、「起きた」のオキヤーセン、「見る」のミヤセン、「する」のシャセン、「来る」のキヤセンといった「基幹+ワ+セン」に由来する形式は衰退が著しい。2001 年調査では、話者たちに明確な使用意識があったが、2017 年調査では高年齢話者に使用意識がほとんどなく、昔の言い方と認識される。この形式 V+ja(R)seN の ja(R) の部分は、「書き+は」「開け+は」のように、基幹+ワに由来する形である。関西方言では V+ja(R)seN は、後にカカヘン、ミーヘン／ヒンなどのヘン／ヒン形に変化するが、龍神ではヒンは見られず、ヘンの形式も 2001 年調査では確認できなかった。その後の 2017 年調査ではカケヘン、ミーヘン、ケーヘン、キーヒンなどの回答が見られるようになる。しかし、2001

年調査よりも早く生まれた話者を対象にした『民話』では、ヘンの使用がごく少数確認できる（ヒンは確認できない）。その様子を 2001 年調査では記述できなかったのである。ヘン形は、明治生まれの話者が多くいた時代から現在に至るまで、大阪などでのように多用されることはないが、龍神の地で細々と使用され続けていたようである。

ヘンに接続する形は、カカヘンなら基幹末母音 a、ミーヘンなら i、タベヘンなら e であり、キエヘン・シエヘンなら基幹末母音 i の後に e を介する。動詞の活用型によってそれぞれに介する母音は異なるが、heN が後接するとき、大阪方言では、カケヘン、メーヘン、タベヘン、ケーヘン、セーヘンのように活用型を問わず、基幹末母音 e をとることができる。活用形を問わず基幹末母音が e になる現象は、否定接辞という文法的単位が後接したことより、その否定接辞が heN であることによって生じたものと考えられる。heN という音連続中には、母音 e が含まれているが、このことが、基幹末母音を e にさせたのであろう。ひとつ前の母音を同化させた現象、つまり逆行同化現象と考えるのが自然であろう。

次に、一段型動詞が r 語幹化する現象は、2017 年調査ではミラン（見ない）のみが確認された。この状況は 2001 年調査でも同様なのであるが、さらに時代を遡った『民話』には、ほかに「出る」でデラン、デラナンダ（否定過去）、「寝る」でネランが確認される。この現象は、衰退しつつあり、少数の一段型活用の動詞に残存しているものと考えられる。

なお、否定過去にはカカナンダ、ミナンダなどのナンダ形が根強い。ほか、カカンカッタ、ミンカッタなどのンカッタ形が見られる。否定推量はカカンヤロー、ミンヤロー／ミランヤローのようなる。否定中止は、カカントやミント／ミラント、否定仮定はカカナンダラ、ミラナンダラ、派生類の「なる」の否定形は、カカニヨーニナル、ミンニヨーニナル／ミランニヨーニナルとなる。

- ・キノーワ テレビオ {ミナンダ／ミンカッタ}。(昨日はテレビを見なかった。)
- ・タローワ ソンナニ テレビワ {ミンヤロー／ミランヤロー／ミヤンヤロー}。(太郎はそんなにテレビは見ないだろう。)
- ・アサノ ニュースオ {ミント／ミラント}

イエオ デテキタ。(朝のニュースを見ないで家を出てきた。)

・ソトオ ミナンダラ アメ フットルノニ キズカナンダ。(外を見なかつたら、雨が降っているのに気づかなかつた。)

・ダンダント ウタバングミオ {ミンヨーニナッタ/ミランヨーニナッタ}。(だんだんと歌番組を見なくなつた。)

否定過去について、2017年調査では、「見る」のミナンダ、r語幹化したミラナンダが確認され、さらにミラナンダから変化したと思われるミヤナンダもわずかに確認される。このミヤナンダからは、ミラナンダのrが弱化脱落したこと、iaの連母音が発生し、それがさらにjaに変化して成立した、というプロセスが想起される。

日高水穂(2014)は、ヤンの由来について、先行研究の諸説のうち、ヤンをランからの変化によって生じた形式とする説を支持する。この検証は、ミヤナンダが旧田辺市、ミラナンダが旧龍神村で見られたという金沢裕之(1988)の報告をもとにしているが、今回、両形式が同じ龍神の中で観察されたことは、ランとヤンの混同・交替が起りうることをさらに裏付けるものとなるだろう。

〈丁寧形〉

丁寧形は、共通語と同形である。

〈使役形〉

使役形は、多段型動詞の「書かせる」がカカセルkak・a-seru/カカス-suのように、基幹末母音がaになつて、seru/suが続く。一段型、二段型動詞の場合は、「見る」であればミサセルmi-saseru/ミサスmi-sasuと基幹に-saseru/-sasuが続く。

「来る」の場合は、コサセルk・o-saseru/コサス-sasuの基幹末母音がoになる。「する」の場合は、サセルs・a-seru/サス-suのように、基幹末母音がaになつて、seru/suが続く。

以上のうちseru, saseru形は一段型、su, sasu形は多段型の活用をする。また、使役の接辞はseru/saseruに変わって suru/sasuruとなり、接辞が二段化することがあるのは、「(1) 活用型と語類の対応」で、述べたとおりであるが、2017年調査では高年層で使用意識があり、中年層話者になかつた。2001年調査(回答者は全て大正生まれ)では、全員が suru/

sasuruを使用する。

・コドモヤケド ナマエグライワ ジブンデ {カカセル/カカスル/カカス}。(子供だけど、名前ぐらいは自分で書かせる。)

・コノ バングミワ コドモニ マイニチ {ミサセル/ミサスル/ミサス}。(この番組は、子供に毎日見させる。)

・ハナコオ ココニ {コサセル/コサスル/コサス}。(花子をここに来させる。)

・タローニ ヒトリデ シゴトオ {サセル/サスル}。(太郎に一人で仕事をさせる。)

ミラスやオキラス、コラスルなどのようr語幹化は、2017年調査では見られない。2001年調査では「ミラス」が1名(4名中)に見られるのみであった。

〈受身形〉

「書く」であれば、カカレルkak・a-reruまたはカカルルruruのように基幹末母音aにreru/ruruが付き、一段型、二段型動詞は、動詞によって基幹末母音をiやeにしてrareru/raruruが付く。「来る」はコラレルk・o-rareru、キヤレルk・i-jareruというように、基幹末母音がoやiになる。

-(ra)reru形は一段型、-(ra)ruru形は二段型であるが、2001年調査では安定的に見られた-(ra)ruruは、2017年調査では、中年層で使用意識がないだけでなく、高年層でもかなり衰退していることが確認される。

キヤレルは2001年調査では、見られなかつた形式である。キヤレルは可能形にも見られ、いずれもキラレルに由来すると考えられる。これは活用する接辞内でrとjの交替が起るという点で、ヤン形がr語幹化した否定形ランに由来するという説の傍証となる。「する」の場合はサレルs・a-reru/サルル-ruru、2001年調査ではセラレル/セラルルが見られた。

・イエノ ヘーニ ラクガキヲ {カカレル/カカルル}。(家の扉に、落書きを書かれる。)

・コロンダ トコロオ ヒトニ {ミラレル/ミラルル}。(転んだところを人に見られる。)

・トキドキ ヨル オソクニ アソビニ {キヤレル/コラレル/コラルル}。(時々夜遅くに遊びに来られる。)

・アイツニワ イツモ ヒドイコト {サレル

／サルル／セラレル／セラルル}。(あいつにはいつもひどいことをされる。)

〈可能(肯定・否定)形〉

可能形は、接辞自体の種類が多いが、動詞自体の活用を中心に報告するため、ここでは能力・状況可能の別を示さず、接辞も全ては示さない。また、2001年調査では、可能の否定形は調査項目外であった。

能力可能では、ヨーカカン、ヨーミランなど否定形で joR+動詞+N の形が見られ、状況可能でも否定でカカレヘン、ミラレンのように、(ra)reN の形が見られる。肯定の可能動詞形（エ段形-ru）、一段型動詞につく rarero、その二段活用形である raruru、ら抜きと言われる rero 形の使用については、能力可能、状況可能の区別ははつきりしない。

rarero 形からの変化と見られる jareru 形は、「来る」のみにキヤレルが見られた。「する」は、可能表現にする場合、「できる」が用いられ、「する」の可能形は確認できなかった。ただし、2001年調査では、セラルル／セラレル／セレラレルが見られる。また、2017年調査からカカレヘンのように、否定にヘンを使用する例が見られるようになる。

〈尊敬形〉

龍神は無敬語地帯であるため、使用されることがあるとすれば、尊敬形は共通語と同形である。多段型動詞と「する」では、カカレル、サレルのように基幹末母音 a の形にレルが後接する。一段型・二段型動詞では動詞によって基幹末母音の i か e に、「来る」では基幹末母音を o にしてラレルが後接する。なお、目上を述語の動作主とした共通語文の方言翻訳では、キヤレルが回答されるが、尊敬語として、はつきりと認識されていない。

- ・センセーガ モースグ ココニ キヤレルヨ。
(先生がもうすぐここに来るよ)

〈継続形〉

多段型動詞、一段型、来る、するともに teru、toru、taRru、joru が使用される。これらは全て多段型の活用をする。teru、toru には進行・結果・習慣の使い分けは見られず、toru が古い言い方とされる。また、taRru については高年層が結果の意味で使用すると意識される。joru も高年層の言い方で使用頻度は低く、進行や習慣を表わす。また、joru は友人か目下に用いて、目上には使用しにくいが、近畿中央部方

言の場合のように、感情的に悪い評価を表わすものではない。

多段型の「書く」の場合、カイテル、カイトル、カイタールのように、音便形に teru、toru、taRru が付く。また、カキヨルのようにイ段形に joru が付く。

一段型、二段型の場合、「見る」ならば mi-toru、mi-teru、mi-taRru、mi-joru となるが、二段型の場合、joru 形についてはオキヨール、アキヨールのようになる。「来る」はキテル／キトル／キタール／キヨル、「する」はシテル／シトル／シタール／シヨルと、基幹に接辞を後接させる。

- ・タローワ イマ テガミオ {カイテル／カイトル／カキヨル}。(太郎は今、手紙を書いている。)
- ・タローワ モー サンサツ ホンオ {カイトル／カイタール／カイテル}。(太郎はもう、三冊本を書いている。)
- ・ハナコワ イマ テレビオ {ミトル／ミテル／ミタール／ミヨル}。(花子は今、テレビを見ている。)
- ・ハナコワ マイアサ ロクジニ オキヨールヨ。(花子は毎朝 6 時に起きているよ。)

2017年調査では、中年層ではトルを使用しているという意識がなく、高年層でもトルは使うがテルを多用するという認識が聞かれる。『民話』には、アスペクト形式としてのトルもヨルも、多数みられる。特にヨルは、見知らぬ相手に「何をしよるんぜ」(p.48)と話しかける例があり、現在の近畿中央部における卑語形式ヨルとは異なり、動作主が話し相手の場合の使用が見られるし、動作主を下位者として待遇していない。

- 『民話』には、タール形やオル形も確認できる。
- ・わしら狸捕りに来たあるんや。『民話』p.48)
- ・狼のとった猪が川原に置いておるのを拾うて … (『民話』p.59)

〈希望形〉

希望形は、共通語と同形で、多段型動詞、「来る」「する」の基幹イ段形、一段型動詞の基幹、二段型動詞の基幹イ段・エ段に「タイ」を後接させる。形容詞型の活用をする。

- ・コノ テガミワ エンピツジャナクテ フデ
デ カキタイ。(この手紙は、鉛筆じゃなく

て筆で書きたい。)

- ・スグニ テレビデ ヤキューガ ミタイ。(すぐにテレビで野球が見たい。)
- ・アシタワ ハヤク オキタイ。(明日は早く起きたい。)
- ・マタ ココニ キタイナー。(また、ここに来たいなあ。)
- ・コノ シゴトワ ミンナデ シタイ。(この仕事は、みんなでしたい。)

〈のだ形〉

「のだ」にあたる箇所はンヤとなり、京阪神のようなネンは、あまり用いられない。

明治生まれ話者が語り手の中心である『民話』でも、ンヤの使用が圧倒的多数であるが、ネンとその過去形テンの使用が認められる。また『民話』では、ノヨ・ンヨといったヤを介さずに終助詞が付く形も用いられる。2017年調査では、この形は女性がよく使うとされる。

- ・コノ マドワ ボタンオ オシテ アケルンヤ。(この窓はボタンを押して開けるんだ。)
- ・用意しとった棒で叩いてん。(『民話』p.51)
- ・(狼が) おぼる(吠える)の中辺路で聞いたことあんのよ。(『民話』p.57)(筆者)
- ・(狼が) よう食いついてくるんよら。(『民話』p.61)

ンヤはいずれの動詞でも、連体非過去形に後接する。二段型の動詞の場合、上の例のように「開ける」を例にとると、アケルンヤとなり、アクリンヤのような二段型の連体形はとらなかつた。

ネンが後接する場合、「書く」ならカクネン、「起きる」ならオキルネン、クルネンのように、連体非過去形にそのまま後接する。基幹末のルの場合、「怒る」ならオコンネン、「見る」ならミンネンなどルをンに変えることがある。また、断定過去の場合、ネンはテンとなり、多段型動詞は基幹音便形、一段型動詞は基幹、二段型動詞は基幹イ・エ段に後接する。

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の交替語幹は、中止形、否定形、なる形で生じ、語幹末母音が a, i, e の語に生じる。ただし

語幹末母音が e の形容詞は「良い」のみである。語幹末母音が u・o の時は、基本的に母音の交替はない。

語幹末母音	交替後	例
a	o	赤い アコ (一) ナル
i	ju	恐ろしい オソロシューナル
u	u	悪い ワル (一) ナル ぬくい ヌク (一) ナル
e	o	ええ (良い) ヨーナル
o	o	重い オモ (一) ナル

語幹末がルであるときは、ルがリに変わることがある。「悪い」であれば、ワリカッタ、ワリヤロ、ワリナル、ワリナイ、ワリテ、ワリナーのように、ほぼすべての活用形でワリの形をとるため、語幹の変異形というべきであろう。

- ・スマニヨ。ワリカッタナー。(ごめんね。悪かったね。)

また、のだ文で「悪いんだ」がワリナになることが『民話』では確認される。

- ・オマエ ドコ ワリナ。(『民話』p.74)

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、連体非過去形と同形。語幹に「イ」を後接させる。

- ・コノ トマトワ アカイ。(このトマトは赤い。)

〈断定過去形〉

断定過去形と連体過去形は同形で、語幹にカッタを付ける。

- ・キヨネンノ トマトワ アカカッタ。(去年のトマトは赤かった。)

〈推量形〉

推量形は、語幹に「イ」を後接させた形に「ヤロー」を後接する。

- ・ナツワ アツイヤローナー。(夏は、暑いだろなあ。)

また、推量過去ではなかったが、過去の事柄についての確認要求の表現として、『民話』には以下のような用例がある。

- ・今は、ラジオ、テレビ、新聞もあるけど、あの当時にや晩に疲れて寝るだけが楽しみじやって、それ以外では楽しみで無かつつろ?

(『民話』 p.138)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形と同形である。

- ・アカイ トマトオ ヨータ。(赤いトマトを買った。)

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形と同形である。

- ・アツカッタ ナツガ オワッタ。(暑かった夏が終わった。)

〈中止形〉

中止形は、下表のように、なる形の場合と同じ母音交替が生じ、下表のようになる。

語幹末母音	交替後	例
a	o	赤い アコ (一) テ
i	ju	恐ろしい オソロシューテ
u	u	悪い ワル (一) テ
e	o	ええ (良い) ヨーテ
o	o	重い オモ (一) テ

〈仮定形〉

仮定形は、語幹に「カッタラ」を後接させる。

- ・ミガ アカカッタラ トロー。(実が赤かったら採ろう。)

〈否定形〉

否定形の場合、語幹の母音交替は下表のように生じる。エ段はエエ (良い) のみである。語幹末母音がア段の場合、高年層ではアコ (一) ナイのように母音交替と長音化を起こすが、中年層話者は、アカナイのようになった。

語幹末母音	交替後	例
a	o	赤い アコ (一) ナイ
i	ju	恐ろしい オソロシューナイ
u	u	悪い ワル (一) ナイ
e	o	ええ (良い) ヨーナイ
o	o	重い オモ (一) テ

〈なる形〉

なる形の場合は、「良くなる」がヨーナルになる以外は、交替した語幹末母音が長音化しにくく、アコナル、ワルナル、オモナルとなり、さらに語幹末母音がiの場合は、「恐ろしくなる」「大きくなる」「嬉しくなる」は、それぞれオソロシナル、オーキナル、ウレシナルのようになり、母音交替も長音化も生じないことが多い。

〈丁寧形〉

丁寧形は、語幹に「イ」を後接させた形に「です」を後接させる。

- ・コノ トマトワ アカイデス。(このトマトは赤いです。)

〈のだ形〉

連体形にンヤを付ける。『民話』では、ンヤがンナになる例も確認できる。

- ・コノ トマトワ ナカマデ アカインヤデ。
(このトマトは、中まで赤いんだよ。)
- ・お前はどこ悪いんな。(『民話』 p.74)

【形容名詞述語・名詞述語】

形容名詞と名詞は、断定・連体・推量形をとる場合、ジャやヤ、ジャローやヤローを後接させる。ジャ・ジャローは高齢層に昔の言い方として認識され、現時点ではヤが優勢であるため、冒頭の表ではヤで統一した。『民話』ではヤ・ヤロー、ジャ・ジャローともに、多数の使用が確認できる。

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、形容名詞、名詞にヤが付く。また、形容名詞の断定非過去形の場合、シズカナ、ゲンキナのように、ヤではなく、2017年調査時点でも高年層でナが後接することがある。ナが後接するときは、さらに終助詞のナやヨがつくことが多い。

- ・ムスコワ ガクセーヤド。(息子は学生だよ。)
- ・コノ ヘヤワ {シズカヤ/シズカナナ}。
(この部屋は静かだ (なあ。))
- ・アノ コ {ゲンキヤド/ゲンキナヨ}。(あの子は元気だよ。)

『民話』には、以下のようにヤを伴わず、ヨラが後接する例がある。

- ・「九シ間にハシ行灯」ていうたら「一つ枕で渡てみたい」ということよら。(『民話』 p.148)
- ヨラは、「来(き)よら」「止めよら」のように、

動詞にも後接する。

〈断定過去形〉

ヤッタを後接させる。形容名詞では、「達者な」をタッシャナカッタにするように、ナカッタを接続させることがある。

- ・タッシャナカッタケド トツゼン ニューインシタ。(達者だったけど、突然入院した。)

〈推量形〉

推量形は、シズカヤロー、ガクセーヤローのように、ヤローを後接させる。

- ・ムコーワ モット シズカヤロー。(向こうはもっと静かだろう。)
- ・アノコワ マダ ガクセーヤロー。(あの子はまだ、学生だろう。)

〈連体非過去〉

連体非過去形は、共通語と同様に、形容名詞の語幹にナを、名詞は述語としての形はなくノを後接させる。

- ・シズカナ ヘヤデ ホンオ ヨミタイ。(静かな部屋で本を読みたい。)
- ・ガクセーノ トモダチ。(今も学生の友達。)

〈連体過去〉

連体過去形は断定過去形と同形である。

- ・シズカヤッタ ヘヤガ サワガシクナッタ。(静かだった部屋が騒がしくなった。)
- ・キヨネンマデ ガクセーヤッタ トモダチ。(去年まで学生だった友達。)

〈中止形〉

中止形は、過去・非過去ともに、シズカデ、ガクセーデのように、デを後接させる。また、過去の場合、シズカヤッテ、ガクセーヤッテのように、ヤッテを後接させることがある。

- ・タローワ ゲンキデ ハナコワ オトナシー。(太郎は元気で、花子はおとなしい。)
- ・タローワ ガクセーデ ハナコワ カイシャインヤ。(太郎は学生で、花子は会社員だ。)
- ・シンパイヤッタケド オモタヨリ ゲンキヤッテ アンシンシタワ。(心配だったけど、思ったより元気で、安心した。)
- ・ソノコロワ マダ ガクセーヤッテ オカネガ ナカッタ。(その頃はまだ、学生でお金がなかった。)

〈仮定形〉

仮定形は、形容名詞・名詞にヤッタラが後接する形のほか、形容名詞ではシズカナカッタラのようにナカッタラを後接させることもある。

- ・マワリガ モット シズカナカッタラ ネムレルヤロー。(周りがもっと静かなら、眠れるだろう。)

ナカッタラを後接させる言い方は、2017年調査の高年層話者には使用意識があったが、中年層話者にはなかった。

〈否定形〉

否定形は、形容名詞・名詞に「ヤナイ」を後接させる。「と違う（トチャウ）」の「と」を脱落させた（シズカ・ガクセー）チャウも用いられる。

- ・コノ ヘヤワ アマリ {シズカチャウ／シズカヤナイ}。(この部屋はあまり静かじゃない。)
- ・タローワ {ガクセーチャウ／ガクセーヤナイ}。(太郎は学生じゃない。)

また、野間純平（2014）が指摘したように、デナイはデとナイの間にとりたて助詞が入ることができると、ヤナイはできない。

- ・ココワ ユーホド シズカデモナイ。
- ・ココワ ユーホド ×シズカヤモナイ。

〈なる形〉

なる形は、シズカニ、ガクセーニのように、形容名詞・名詞にニを介してナルにつなげて、シズカニナル、ガクセーニナルと言う。

〈丁寧形〉

丁寧形は、形容名詞・名詞に「です」を後接させる。

- ・ココワ オモッタヨリ シズカデス。(ここは思ったより静かです。)
- ・ワタシワ マダ ガクセーデス。(私はまだ学生です。)

〈のだ形〉

形容名詞述語・名詞述語ともに連体形にンヤ、ンヨを後接させる。2017年調査では、ンヨは女性的だという認識が聞かれた。ンヨはンヤヨとならず、ヤが現れない。

- ・イマワ ゲンキナンヤネ。(今は元気なんだね。)
- ・コノ ヘヤワ {シズカナンヤ／シズカナン}

- ヨ}。(この部屋は静かなんだ (よ)。)
・ガクセーナンヨ。(学生なんだよ。)
・ガクセーナンヤ。(学生なんだ。)

用例出典

『民話』: 和歌山県民話の会 (1987) 『きのくに民話
叢書 5 紀州龍神の民話』私家版

参考文献

- 徳川宗賢・真田信治 (1986) 「和歌山県紀ノ川流域の
言語調査報告」『大阪大学 日本学報』5
野間純平 (2014) 「大阪府方言」方言文法研究会編『全
国方言文法辞典資料集 (2) 活用体系』科研費
成果報告書
日高水穂 (2014) 「近畿地方の方言形成のダイナミズ
ム—寄せては返す「波」の伝播—」小林隆編『柳
田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形
成論—』ひつじ書房
村内英一 (1982) 「和歌山県の方言」『講座方言学 7
近畿地方の方言』国書刊行会
(西尾純二・澤村美幸)